

# 宇宙航空研究開発機構研究開発資料

JAXA Research and Development Memorandum

タービン諸特性(回転部重量、翼応力、動翼共振回避、Thomas Force)を 考慮したロケットターボポンプ用タービンの多目的最適化

> 瀧田 純也, 福田 太郎, 宇山 遼一, 船﨑 健一, 内海 政春

> > 2013年1月

## 宇宙航空研究開発機構

Japan Aerospace Exploration Agency

## タービン諸特性(回転部重量, 翼応力, 動翼共振回避, Thomas Force) を考慮したロケットターボポンプ用タービンの多目的最適化\*

瀧田 純也\*1,福田 太郎\*2,宇山 遼一\*2,船崎 健一\*3,内海 政春\*1

### Multi-Objective Optimization of a Rocket Turbopump Turbine Considering the Turbine Characteristics (i.e., Rotor Weight, Blade Stress, Avoidance of Blade Resonance and Thomas Force)

Junya TAKIDA<sup>\*1</sup>, Taro FUKUDA<sup>\*2</sup>, Ryoichi UYAMA<sup>\*2</sup>, Kenichi FUNAZAKI<sup>\*3</sup> and Masaharu UCHIUMI<sup>\*1</sup>

#### ABSTRACT

Because rocket turbopump turbine blades have higher loading, there is a possibility of shaft vibration problem due to "Thomas Force". In order to reduce shaft vibrations, it is important to keep "Thomas Force" small. In the previous report, validity of optimization process for the reduction of Thomas Force was confirmed by performing Parameter Design and Multi-Objective Genetic Algorithm (MOGA). In this paper, by increasing the number of objective functions, the results of multi-objective optimization for reduction of Thomas Force and the considering the feasibility of blade structure are discussed. It was found that optimized blade reduced 10% in weight, 30% in Thomas Force, compared from the original blade.

*Keywords* : Multi-Objective Genetic Algorithm(MOGA), Parameter Design, Rocket Turbopump, Self-Organizing Map(SOM), Thomas Force

#### 1. 緒言

ロケットターボポンプ用タービンはロータダ イナミクス特性の観点(=オーバハング量を小 さくする)から、少ない段数(単段 or 2 段)で も必要な馬力を発生できる"衝動タービン"とし て設計される為に段当たりの翼負荷が高くなる ことが特徴である.このような高負荷翼では、 タービン動翼で発生する不安定化力に起因する 軸振動が問題となる場合がある.不安定化力の 一つである Thomas Force<sup>(1)</sup>に起因するロケッ ト用ターボポンプの軸振動事例として、LE-7A 液体水素ターボポンプ開発初期における亜同期 振動が挙げられる<sup>(2)</sup>が、この場合は軸系全体 の減衰を増加させることによって亜同期振動を 抑制することが出来ている.

しかしながら、今後新たなターボポンプを開 発する際、上記のような対策だけでは振動を十 分に抑制できない可能性も考えられる為、 Thomas Force 自体を低減させる、即ちタービ ン動翼で生じるトルクアンバランス力が小さく なるようなタービン形状を見出すことが重要で ある.

本報では Thomas Force の低減に加えて、タ ービン重量および翼応力の低減を目的とした多 目的最適化を行ったので、その結果について述 べる.

<sup>\*</sup> 平成 24 年 12 月 18 日受付 (Received 18 December 2012)

<sup>\*1</sup> 宇宙輸送ミッション本部 宇宙輸送系推進技術研究開発センター エンジン研究開発グループ

<sup>(</sup>Engine System Research and Development Group, Space Transportation Propulsion Research and Development Center, Space Transportation Mission Directorate)

<sup>\*2 (㈱</sup>第一システムエンジニアリング 第3技術部 (The Third Engineering Department, Daiichi System Engineering Co., LTD.)

<sup>\*3</sup> 国立大学法人 岩手大学工学部 (Faculty of Engineering, Iwate University)

#### 2. 設計対象および解析手法

#### 2-1 設計対象

設計対象は LE-7 原型エンジン用液体水素タ ーボポンプのタービンを選定した. Fig. 1 には LE-7 液体水素ターボポンプの断面図を示す.本 ターボポンプは駆動用タービンとインデューサ と2段の遠心羽根車からなるポンプ部とが同軸 で繋がれており,2 組の玉軸受にて支持する構 造となっている.またインペラとタービンとの 間には軸封シールが設けられている.当該ター ビンの主要諸元を Table 1 に示す.以降の最適 化ではこれを"現行翼"と称す.



Fig. 1 Cross-section View of the Turbopump Table 1 Typical Specification of LE-7 Prototype

Turbine Type	Impulse Turbine
Stage Number	Single Stage
Mean Diameter	0.200 m
Rotational Speed	46,300 rpm
Mass Flow Rate	41.2 kg/s
Inlet Total Pressure	23.6 MPs
Inlet Total Temperature	972 K
Pressure Ratio	1.46
Shaft Power	23.6 MW

Fuel Turbine

#### 2-2 Thomas Force の評価方法

Thomas Force とは、軸のふれまわり振動によ って生じるタービン動翼先端からの漏洩量の周 方向不均一によって生じるトルクアンバランス 力であり、軸系のふれまわり振動に対して励振 力として作用する<sup>(1)</sup>.本報では Thomas Force を準定常的に扱い、全周均一のクリアランスと した定常解析により求めたトルクから Thomas Force を算出する. Thomas Force の評価方法に ついては文献(3)を参照されたい.

#### 2-3 解析手法と最適化手順

Fig. 2 に最適化の手順を示す.第一段階では パラメータ設計によってThomas Force 低減に寄 与の大きな設計パラメータを選定すると同時に, 設計パラメータの探索範囲の絞り込みを行う.

続く第二段階では、応答曲面法によりタービ ン重量と翼応力の近似式を求めた後に、遺伝的 アルゴリズムを用いてタービン重量および翼応 力の最小化とThomas Forceの低減を目的関数と した多目的最適化を行う.最適化計算に際して は、設計パラメータの組合せ毎にタービン性能 を予測する必要があるが、本報では既存の1次 元損失モデルである"Craig & Cox モデル<sup>(4)</sup>"を 用いる.以降これを"1次元解析"と称す.本 報では自己組織化マップ<sup>(5)</sup> (Self-Organizing Map, 以降 SOM と称す)により解析結果を整理した 後、最適解の選定を行う.

第三段階では1次元解析により求めた最適翼 形状に対し,定常CFD解析によるThomasForce 低減効果の検証と,FEM解析による翼応力と動 翼固有値の共振回避の検討を行い,現行翼と最



2

CFD Solver	Pushbutton CFD <sup>®</sup>
Operating Fluid	Combustion Gas
Boundary Condition	Inlet: Absolute Pressure
	Absolute Temperature
	Outlet: Static Pressure
	Wall: Non-slip, Adiabatic
Space Accuracy	2nd Order
Turbulence Model	Spalart-Allmaras 1eq. model
$Y^+$	200
Cells in Tip Clearance	12 Cells
Grid size	1,900,000 Cells

Table 2 CFD Conditions

Table 3 FEM Con	ditions
-----------------	---------

FEM Solver	Pushbutton FEA <sup>®</sup>
Model	3D Solid Model
Material	MAR-M247 LC DS
Loading Condition	Centrifugal Force
	(100% Speed)
Constraints	Blade Root Fully Fixed
Model size	11,440 elements

適翼の各特性値を比較する. Table 2 に CFD 解析条件を, Table 3 に FEM 解析条件を示す.

#### 3. パラメータ設計

#### 3-1 パラメータダイヤグラム

Fig. 3 にパラメータダイヤグラムを示す. ま た制御因子を Table 4 に, 誤差因子を Table 5 に示す. 制御因子を L36 直交表に誤差因子を L16 直交表に割付け, 入力因子であるタービン 圧力比(PR<sub>TS</sub>)を3水準(=1.44, 1.46, 1.48) とした合計 1,728(=36×16×3)回の1次元解析 によりタービン軸出力を求め,これらの結果か ら標準 S/N 比<sup>(6)</sup>を計算する.S/N 比が高いほど 誤差因子(=チップクリアランス変化や形状ば らつき)に対してタービン軸出力が変化しにく くなるため,S/N 比が大きいほど Thomas Force が小さくなる.



Fig. 3 Parameter Diagram of Turbine System

#### 3-2 要因効果図

Fig. 4 に標準 S/N 比の要因効果図を示す.図 中横軸のアルファベットと数字は制御因子とその水準値を表す.

Na	No. Control Factors		IInit	Level		
INO.			Unit	Level 1	Level 2	Level 3
1	Α	Thickness Chord Ratio of Nozzle Blade	-	0.180	0.200	-
2	В	Thickness Chord Ratio of Rotor Blade	-	0.160	0.180	-
3	С	Wedge angle of Rotor Blade at Exit	deg.	4.00	5.90	-
4	D	Static Pressure at Nozzle Exit	MPa	17.2	17.6	17.9
5	Е	Solidity at Nozzle	-	1.60	1.97	2.20
6	F	Stagger Angle of Nozzle		35.0	45.0	55.0
7	G	Blade Exit Angle at Nozle		17.0	20.0	23.0
8	Н	Chord Length of Nozzle	m	3.60E-2	4.12E-2	4.50E-2
9	Ι	Solidity at Rotor		1.20	1.65	2.10
10	J	Leading Edge Radius of Rotor		0.600	0.711	0.800
11	K	K Incidence Angle at Rotor		0.00	1.00	2.00
12	L	L Blade Exit Angle at Rotor		24.0	27.1	31.0
13	Μ	M Stagger Angle of Rotor		12.0	18.0	24.0
14	N	N Chord Length of Rotor		1.30E-2	1.62E-2	1.90E-2
15	0	O Mean Diameter		9.50E-2	1.00E-1	1.05E-1
16	Р	P Tip Clearance		5.00E-4	5.50E-4	6.00E-4

 Table 4
 Control Factors and Their Levels for Parameter Design

No.	Noise Factors		Unit	Level 1	Level 2
1	А	Throat Area of Nozzle	%	-0.15	0.15
2	В	Throat Area of Rotor	%	-0.15	0.15
3	С	Stagger Angle of Nozzle	deg.	0.00	0.50
4	D	Thickness Chord Ratio of Nozzle Blade	-	0.00	5.0E-3
5	E	Blade Exit Angle at Nozzle	deg.	0.00	5.0E-2
6	F	Chord Length of Nozzle	m	0.00	1.0E-4
7	G	Trailing Edge Thickness of Nozzle	m	0.00	5.0E-6
8	Н	Leading Edge Radius of Rotor	m	0.00	5.0E-5
9	Ι	Stagger Angle of Rotor	deg.	0.00	0.50
10	J	Thickeness Chord Ratio of Rotor Blade	_	0.00	5.0E-3
11	K	Chord Length of Rotor	m	0.00	1.0E-4
12	L	Blade Exit Angle at Rotor	deg.	0.00	5.0E-2
13	Μ	Trailing Edge Thickness of Rotor	m	0.00	5.0E-6
14	Ν	Mean Diameter	m	-2.5E-4	2.5E-4
15	0	Tip Clearance	_	50% Narrowed	Nominal Clearance

 Table 5
 Noise Factors and Their Levels



Fig.4 Graphs of Factorial Effects for Signal to Noise Ratio

**Fig. 4** より,標準 S/N 比の変化が大きな制御 因子は次の通りである.

- ノズル翼出口静圧(因子 D)
- ② ノズル翼出口角度(因子 G)
- ③ 動翼ソリディティ (因子 I)
- ④ 動翼出口角度(因子L)
- ⑤ 動翼コード長(因子N)
- ⑥ チップクリアランス (因子 P)

これらの制御因子について,現行翼の水準値 を白抜き丸印で,S/N比が大きくなる水準値を 角型印で表すが,何れの制御因子もS/N比が大 きくなるのは現行翼よりも水準値を小さくする 方向となっている.従って次の第二段階で行う 最適化計算では,これらの制御因子の探索範囲 をこの範囲に絞り込んで最適解の探索を行う.

## 4. 遺伝的アルゴリズムによる多目的 最適化

#### 4-1 重量および翼応力の応答曲面近似式

本報の最適化ではタービン重量および翼応 力を翼体格成立性の評価指標として選定し、そ の近似式を応答曲面法により求める.本来ター ビン重量はケーシングや配管も含めて評価すべ きであるが、本報ではロータ設計に直接関係す るタービン動翼(ディスクを含む回転部)の重 量のみを対象とする. Table 4 に示す制御因子の 中から動翼の体格に関係する8因子(因子 D, I, J, K, L, M, N, O)を用い、これらをL18 直 交表と組合せることによって 18 式のタービン 形状(サンプル点)を得る. 3 次元 CAD により



Fig.5 Accuracy Validation of the Approximation Model

重量を FEM により翼応力をそれぞれ算出し, これらのサンプル点から多項式近似式を求める. タービン材料はニッケル基耐熱合金(ディスク 部: Inconel718, 動翼: MAR-M247 LC DS(一 方向凝固材))であり,その材料特性は文献(7) の値を用いる.

Fig. 5 には各近似式の精度検証結果を示すが、 何れも相関係数は 0.9 以上となっており、重量 および翼応力の近似式が十分な精度を有してい ることが確認出来るので、以降はこれらの近似 式を用いて最適化を行うことにする.

#### 4-2 最適化問題の設定

多目的遺伝的アルゴリズム(以下 MOGA と 称す)は生物の進化過程を模擬した計算手法で ある.本報では MOGA の中でもチューニング パラメータが存在せず,比較的高速な NSGA-Ⅱ<sup>(8)</sup>を用いる.個体数 80,世代数 200 として, 総解析数 16,000 回の1 次元解析により最適解を 求める.

Table 6 は目的関数および制約条件を示す.本 報ではロケットエンジンおよびターボポンプ全 体が最適となる最適化を行う.すなわちターボ ポンプ用タービンの最適条件とは、ポンプ側で 要求される出力を最も軽量なタービンで達成す ることである.また信頼性向上の観点から, Thomas Force および翼応力の最小化も併せて目 的関数とする.また制約条件として,ポンプ必 要仕事(現行翼と同じ)に加え,エンジンシス テムとのマッチングを考慮し,タービン流量お よび回転数を固定する.

 
 Table 6 Objective functions and Constraint functions

Objective	Turbine Weight: Minimize
functions	Thomas Force:Minimize
	Blade Stress:Minimize
Constraint	Tubine Shaft Power:Fixed (23.6MW)
functions	Turbine Flow Rate: Fixed (41.2 kg/s)
	Rotational Speed:Fixed (46,300rpm)

#### 4-3 最適化結果の整理と最適解選定

今回の最適化では,複数の目的関数,制約条件を持った多次元データが得られる.このよう なデータに対しては,SOMによるデータ整理が 有効である.SOMは多次元データを2次元マッ プ上の配置として表すデータ可視化の手法であ り,目的関数や設計変数間のトレードオフ関係 を明確に出来る.

Fig. 6 には SOM によるデータ整理結果を示



Fig. 6 The SOM of Objective Functions and Design Parameters

す. Fig. 6 上段は目的関数に対する SOM を示し ており、3 つの目的関数にはトレードオフの関 係を示すことが分かる.例えばタービン重量が 最小となる位置(SOM の左下)では、Thomas Force と翼応力は最小値にはなっていない.ま た Fig. 6 中段および下段には代表的な設計変数 に対する SOM を示すが、これらの結果から目 的関数と設計変数との関係が明確になる.例え ばタービン平均径の SOM(下段右)とタービン 重量の SOM(上段左)は類似の様相を示してお り、両者は正の相関関係(=平均径が小さいほ どタービン重量も軽くなる)を有している.同 様にノズル出口角度(中段中央)や動翼ソリデ

ィティ(中段右)はThomas Force(上段中央) に対しても正の相関関係が見られ,この関係は Fig. 4に示す要因効果図とも整合する.また, 動翼出口角度の SOM(下段左)や動翼高さの SOM(下段中央)は翼応力の SOM(上段右) と類似の様相を示しており,前者は負の相関関 係を後者は正の相関関係を有している.

以上に示した SOM からタービン重量, Thomas Force, 翼応力は何れもトレードオフ関 係を示すことから目的関数全てを最小化するこ とは出来ない.従って本報では最適条件の定義 (4-2 節参照)を踏まえ,重量最小となるター ビンを最適解として選定する.

#### 5. 最適化結果

#### 5-1 現行翼との特性値比較

Table 7 には、最適翼の形状特性値を現行翼と 比較して示す. 最適翼は現行翼に比べて平均径 が小さく、子午面形状は翼高さが高くなる方向 に変化している. Fig. 7 にはタービン重量, Thomas Force, 翼応力, タービン軸出力, 動翼 固有値の各特性値について現行翼を基準に比較 した結果を示す.(参考として, Fig. 7 中には Thomas Force が最小となる翼の特性値(□)も 併記する.) なお Fig. 7 における Thomas Force は1次元解析により求めた値である. (CFD に よる Thomas Force 低減効果の検証結果について は後述する.)最適翼(●)は現行翼(\*)に比 ベ, 重量が 10%, Thomas Force が 20%低下する 一方, 翼応力は若干(10%) 増加する. またタ ービン軸出力は現行翼と同等であり制約条件を 満足している. 最適翼の動翼固有値は現行翼に 対して10%上昇するが、この影響については5-2 節で考察する.

1次元最適設計で選定した翼について CFD に より Thomas Force 低減効果の検証を行った結果 を Fig. 8 に示す. Thomas Force は前報<sup>(3)</sup>に示し







た Cross-coupled Stiffness (以下 K<sub>xy</sub>と称す)を 用いて評価する. 図中には1次元解析により求

No.	Item	Unit	Original		Optimized (We	ight Minimum)
1	Overview	-				
2	Meridional Shape	-				
3	Mean Diameter	m	0.200		0.1	90
4	Tip Clearance	m	6.00E-4		5.00	)E-4
	Position		Nozzle	Rotor	Nozzle	Rotor
5	Number of Blades	-	30	64	25	69
6	Blade Height	m	2.03E-2	2.26E-2	2.34E-1	2.55E-2

 Table 7
 Characteristics (Physical Configuration) of Optimized Blade

めた  $K_{xy}$ の値も併記して比較する. CFD により 求めた最適翼の  $K_{xy}$ は  $5.6 \times 10^5$  [N/m]であり,現 行翼の値 ( $K_{xy}$ =8.2×10<sup>5</sup> [N/m])と比較して約 30%低減しており,1 次元解析により評価した 低減効果(約 20%)と同等であることを確認し た.

翼応力について以下に考察する. Table 3 に示 す通り,本報では定格回転数(46300 rpm)にお ける遠心力を FEM の荷重条件として与え,遠 心荷重に対する翼根部の膜力(1 次応力)を評 価対象としている.本タービンの駆動ガスは水 素過多の高温燃焼ガスであるために材料の水素 脆性が問題となるが,本タービンの動翼材料<sup>(7)</sup>

(MAR-M247 LC DS) は使用温度(約900 K) における機械的特性の低下は無く,水素による 脆化の影響を受けない材料である.応力評価結 果を Table 8 に示すが,最適翼の安全率は2.8 と 十分な安全率を有しており,現行翼(安全率3.0) から材料を変更すること無く成立する見込みが 得られた.但し本評価結果は遠心荷重に対して の安全率(瞬時破壊しない)であり,今後は想 定される最大回転数での遠心力やガス曲げ力,2 次応力(熱荷重)および振動応力などを考慮し, より厳密な翼体格の評価を行う予定である.

Table 8 Evaluation of Blade Stress

Item	Unit	Original Blade	Optimized Blade
Blade Stress	MPa	324.8	350.4
Proof Stress	MPa	1000	$\leftarrow$
Safety Factor	-	3.0	2.8

#### 5-2 動翼固有値との共振回避の検討

Fig. 9 には最適翼および現行翼のキャンベル 線図を示す. 図中の固有値は FEM により求め た解析値である.

現行翼の開発試験においては,40000rpm 付近 での運転時間が長い場合には動翼の2次曲げモ ードとノズルウェーク励振力(30枚)との共振 による動翼損傷が生じたため、ノズル翼枚数を 33 枚に変更し共振を回避する対策が採られた <sup>(9)</sup>.現行翼のキャンベル線図(Fig.9(a))を見 ると,30 ハーモニック(ノズル翼枚数 30 枚)



(a) Original Blade

(b) Optimized Blade

Fig. 9 Campbell Diagram of Present Optimization

の場合は 40000rpm 付近で動翼 2 次曲げモード の固有値に近い.

一方の最適翼のキャンベル線図(Fig.9(b)) を見ると,最適翼では動翼固有値(2次曲げモ ード)が若干上昇(約10%)することとノズル 翼枚数が現行翼に比べて少なくなることにより, 定格回転数(46300rpm)においても25ハーモ ニック(ノズル翼枚数25枚)は動翼2次曲げモ ードの固有値を超えることは無く,15%以上の 余裕を持って共振を回避していることが分かる.

## 6. Thomas Force 低減による軸系振動 安定性評価

5-1 節より,最適翼の Thomas Force は現行翼 と比べて 30%低減する結果が得られた.本章で は Thomas Force がターボポンプ軸系の振動安定 性に及ぼす影響を評価するため,線形振動モデ ルを用いた軸振動解析を行う.

#### 6-1 ターボポンプ軸系のモデル化と解析手法

軸振動解析は Adachi<sup>(10)</sup> らが構築したターボ ポンプ軸系の線形振動モデルを用いる.解析対 象は LE-7 液体水素ターボポンプとし,一次元 はり要素を用いて構築した有限要素モデルを Fig. 10 に示す.この有限要素モデルは,軸,イ ンデューサ,第一段および第二段インペラ,軸 受支持部(ポンプ側とタービン側の二箇所),軸 シールおよびタービンによって構成され,各部 品には Table 9 に示す材料物性を与えている. 本モデルの全長は 0.564m,重量は 21.1kg であ る.

Table 9 Material Properties for the FEM Model

Component	Material	Density (kg/m <sup>3</sup> )	Young's Modulus (GPa)
Shaft	Inconel Alloy 718	8,220	216 (-189°C)
Inducer	Ti5Al-2.5Sn	4,500	132 (-253°C)
Impeller	Ti5Al-2.5Sn	4,500	132 (-253°C)
Bearing	SUS440C	7,870	220
Shaft Seal	Inconel Alloy 718	8,220	190 (204°C)
Turbine	Inconel Alloy 718	8,220	163 (649°C)

 Table 10 Comparison of Lower Three Natural

 Frequencies of Linear Vibration Model of Turbopump

 Rotor

Vibration	Natural Frequency (Hz)			
Mode	Analysis	Experiment		
1 <sup>st</sup> bending	254.7	250		
2 <sup>nd</sup> bending	350.6	350		
3 <sup>rd</sup> bending	463.2	-		

これらの構成部品間の相互作用は接続剛性 により考慮し,その値は軸系の free - free 状態に おける固有振動数が実験値と一致するように定 め,同様に軸受剛性の値も軸受支持状態での固 有振動数が文献(11)に示される値と一致する



Fig. 10 FEM Model of Turbopumop Rotor

ように定めた.軸受支持状態での固有振動数の 比較結果を Table 10 に示すが,固有振動数の解 析値と実験値とは良好に対応しており,本モデ ルの妥当性を確認した.

#### 6-2 解析条件

Table 11 に解析条件を示す.本解析はタービン部のThomas Forceが軸系の振動安定性に及ぼす影響を比較することが目的であるため,ターボポンプの線形振動モデルに対しては Thomas Force の作用のみを考慮する. Case1 は Thomas Force が作用しない場合, Case2 は 5-1 節で求めた現行翼の Thomas Force が作用する場合, Case3 は最適翼の Thomas Force (現行翼に比べて 30% 低減) が作用する場合に対応している.

Thomas Force の作用により生じる軸振動は, 軸系の減衰が低下することにより生じる自励振 動である.従って軸系振動安定性の評価は,軸 振動解析により得られる各モードのモード減衰 比を比較することにより行う.

# Table 11 Analysis Condition of Linear Vibration Model of Turbopump Rotor

No.	Cross-Coupled Stiffness, K <sub>xy</sub> (N/m)
Case1	None
Case2	8.2×10 <sup>5</sup>
Case3	5.6×10 <sup>5</sup>

#### 6-3 解析結果

Fig. 11 に解析結果を示す. 図中横軸は 1 次か ら 3 次までの各振動モード(F:前回り(Foward Precession), B:後ろ回り(Backward Precession)) を示し, 各モード減衰比の大きさを棒グラフの 高さで表している.

Thomas Force の作用を考えない場合(Case1), 各モードの減衰比は 2~5%程度となっており, 本軸系は安定である.しかし Thomas Force の作 用を考慮した場合(Case2)には,1次前回り(1 F)のモード減衰比が 0%程度にまで低下して おり,この減衰比の低下によって1次前回りの 軸振動(約 250Hz)が発生することになる.こ れに対し Thomas Force の低減(現行翼に比べて 30%低減)を図った場合(Case3)には,1次前 回り(1F)のモード減衰比が 1.3%程度にまで 改善する結果が得られた.

以上の結果から, Thomas Force 自体を低減す ることは1次前回りの軸振動の抑制に対して有 効な対策であることを確認した.



Fig. 11 Damping Ratio of Each Mode

#### 7. 結言

LE-7 原型エンジン用液体水素ターボポンプ のタービンを対象にThomas Forceの低減に加え て、タービン重量および翼応力の低減を目的と した多目的最適化を行い、以下の結論を得た.

- パラメータ設計により Thomas Force の 低減に寄与の大きな設計パラメータが 明らかになった.また MOGA 最適化に より,現行翼と同等の軸出力を有しなが ら, Thomas Force が 30%,タービン重量 が 10%低減する最適翼を得た.
- (2) 最適翼は定格回転数(46300rpm)において動翼固有値(2次曲げモード)との共振を回避することが出来る.

- (3) SOM によるデータ整理により目的関数 と設計変数間の関係が明らかになった. タービン重量, Thomas Force, 翼応力の 各目的関数は何れもトレードオフの関 係を示し,これら全ての目的関数を満足 (最小化)する最適翼は得られないこと が分かった.
- (4) Thomas Force 自体を低減することは、1
   次前回りの軸振動の抑制に対して有効 な対策である。

#### <参考文献>

- Thomas, H. J., Instable Eigenschwingungen von Turbinenlaufern, Angefaucht durch die Spaltstromungen Stopfbuschsen un Beschaufelungen, AEG-Sonderdruck, (1958), pp.1039-1063.
- (2) Motoi, H. et al., Sub-Synchronous Whirl in the LE-7A Rocket Engine Fuel Turbopump, Second International Symposium on Stability Control of Rotating Machinery (ISCORMA-2), 4-8 August 2003
- (3) 瀧田・他3名、ロバスト設計手法によるターボポンプ用タービンの Thomas Force 低減、ターボ機械協会誌, Vol.40, No.6, 2012, pp. 350-358.
- (4) Craig, H. R. M., Cox, H. J. A, Performance Estimation of Axial Flow Turbines, Proc. I. Mech. E., Vol. 185 32/71, (1970-71), pp.407-424.
- (5) Obayashi, S., et al., Multi-Objective Design Exploration for Aerodynamic Configurations, 35th AIAA Fluid Dynamics Conference and Exhibit, (2005), AIAA 2005-4666
- (6) 井上・他4名,入門パラメータ設計,(2008),pp.145-184, 日科技連
- (7) 吉田・他3名,水素脆性試験装置の試作とLE-7タービン材料(Inconel718, MAR-M247 LC DS)の高温高圧水素中での引張り特性, NAL TR-1092 (1991)
- (8) K. Deb et al., A Fast and Elitist Multi-objective Genetic Algorithm: NSGA-II, IEEE Transactions on Evolutionally Computation, Vol.6, No.2 (2002), pp.182-197.
- (9) 太田,福島,上條,LE-7 エンジン用液体水素ターボポンプの開発,日本航空宇宙学会誌,第46巻第539号(1998), pp. 705-711.

- (10) 安達・他 2 名, ターボポンプ形態設計のための線形 振動モデリング, ターボ機械, Vol.40, No.7, 2012, pp.433-440.
- (11) 坂爪・他 3 名,高出力タービンのトルク差による LE-7A 液水ターボポンプの亜同期振動,日本機械学 会講演論文集(2003(2)), 2003, pp.13-14.



本印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす紙を使用しています。

This document is provided by JAXA